

## 「教えて！研究倫理のコモンセンス」開催案内

### 開催趣旨

研究機関において研究倫理教育を担当する方や、研究倫理教育に興味のある方が参集し、お互いが抱える課題や論点を共有し考えることで、サイロエフェクトに陥らないよう横の連携を醸成するとともに、公正な研究活動を行うための共通の問題意識を確認し合う。

### 概要

文部科学省・配分機関等が行った国内外の公正研究の取組みに関する調査を見ると、国内において、そのリソースが国内に十分でないこと、リソース開発に携わる人材が少ないこと、教育手法・リソース開発を行う人材が孤立していること、また、国外を見渡せば、教育手法・リソース開発は学際的共同作業であること、教育効果の評価方法・研究公正コンソーシアムの必要性や日本からの情報発信が少なく海外から求められていることなど、が挙げられます。

我が国の公正研究の取組では、ガイドラインが定める研究倫理教育責任者の設置が必須の事項です。しかしながら、研究倫理教育責任者の実態は、研究機関経営陣であって、実際の研究倫理教育プログラムの策定は、本会議に参集するような研究公正担当者（以下、RIO）が行うことも少なくありません。RIOのバックグラウンドは、事務官、人文科学・自然科学の研究者等、多様である反面、組織を越えたお互いの情報交換は十分でないように思われます。研究者は、経験からの倫理観を提供できる反面「おらが倫理」に陥りやすく、事務官は、文科省や配分機関等が求める最低限の規範教育を研究者の顔色を伺いながら進めているのが現状ではないでしょうか。そのような慣習化された研究倫理教育は研究者の自律的取組みとしての研究倫理教育をタコツボ化させ、硬直化させる恐れがあります。それぞれの機関での「タコツボ化、サイロエフェクト」が懸念されるどころです。また、海外での取組も日本から見ると進んでいるように見えますが、その裾野は決して広くはなく課題も多いのが現状です。日本で困っていることは、海外でも同様に懸案事項であることが多いのです。日本が研究倫理教育の課題に積極的に取り組み、その解決方法を発信することは、海外の同様の立場の人々にとっても意義深いものとなります。

本イベントでは、まず、参加者を数人のグループに分け、アイスブレイクとして「他己紹介」を行ないます。その中で、自分がこのイベント参加によって何を成し遂げたいのかを明確にして頂きます。次に、「研究者が身につけるべき研究姿勢」について講義を行います（演者調整中）。ここでは、研究者が倫理的に振る舞うために考えるべきポイントを紹介します。続いて、他己紹介で編成したグループで「研究者が身につけるべき姿勢」について討論を行ないます。ここでは、参加者それぞれが抱える課題等や分野による違い、日頃考えていることなどを踏まえた討論を行います。そして、実際に、どのように研究倫理教育の中で実現するかをグループ内でまとめます。最後に、数グループについて内容を発表して頂き、全体討論を行います。

参加者がお互いを知り、研究倫理のコモンセンスについて考え、共有し合うことができれば、日本の公正な研究活動がより普遍的に洗練されていくものと考えています。